

Title	慶應義塾との絆：新「萬來舎」建設から解体へ(記憶としての建築空間： イサム・ノグチ/谷口吉郎/慶應義塾)
Sub Title	My Vinculum with the Keio Gijuku : A Sad Story of the Architecture "Shin Banraisha" from Beginning to End(Architectural Space as Memory : Isamu NOGUCHI, Yoshiro TANIGUCHI, and Keio University)
Author	由良, 滋(YURA, Shigeru)
Publisher	
Publication year	2005
Jtitle	Booklet Vol.13, (2005.) ,p.22- 35
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000013-04211345

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾との絆

—— 新「萬來舎」建設から解体へ ——

由良 滋

1

戦後の混乱が続く昭和24年(1949)、東京美術学校(現東京芸術大学)の建築科図書室で戦前の建築雑誌を拵げながら就職の事を考えていた。多くの建築作品を見ている中で強く心にとまる美しい作品が目に入った。これが谷口吉郎設計《慶應義塾大学予科日吉寄宿舍》(1938)の建築作品(図1)で、私にとって谷口吉郎先生を知る最初の出合いであった。私の学生生活は荒廃した戦後の中で、教育はもちろん食べることさえ十分でない苦しい毎日であった。それに加え終戦直前に軍隊のトラックとの交通事故がもとで父を亡くし、経済的にも困窮し、学生の身でありながら建築設計事務所で働く二重生活を続けていた。思い返せばこの生活は職人としての技能を身につけるのに良き修行時代であった。

この様な忙しい生活の深い反省もあって卒業後はすぐれた建築家の下で経験を積みたいたいと考えていた。その矢先この谷口先生の作品との出合いにより無性に先生のもとで働いてみたいと考えるようになった。幸運にも東京工業大学建築学科の、当時講師であった建築家・清家清先輩の御世話で直接お願いすることが出来た。丁度その時、副手の欠員があり、幸運にも研究室の一員に加えて戴けることになった。それから一年近く、毎朝研究室の床拭き掃除、お茶汲みから始まる日々が続いた。

小さな先生の研究室は、書机、製図台と入口の目隠し兼用の書棚が置かれ、片方の壁には天井までの造付け書棚、対面の壁にはたしか東大寺・戒壇院、多聞天像の写真の額が掛っていたと記憶する。そこは静寂な、厳粛な空間で、椅子に腰掛け、作品集をじっと眺め、原稿書きに没頭する先生のお姿があった。そして訪問客も多くお忙しい毎日であった。

最初の建築の仕事は三田山上に建つ《第二研究室》、(萬來舎)で、先生の設計手順はこのように始まる。まず弟子の中から担当者を決める。今回は私が選ばれ、研究室で先生の真黒に書込んだスケッチを正確な寸法に何度も書き起し、図面にすることであった。

図1 谷口吉郎
慶應義塾大学予科日吉寄
宿舎 1938年

この基本設計の段階は弟子にとって一番緊張する時間で、先生を恐ろしく感ずる時でもあった。私はこの完了と同時に慶應義塾の職員となって、基本設計を携え三田山上の塾監局・工務課（課長・楠元一正）へ異動するのである。ここですでに《四号館》、《学生ホール》、《中等部校舎》の設計を手掛けた先輩の弟子の方々と共同作業で、実施図面の作業に取り組むのである。先生も度々目を通しにお出掛けになった。構造設計には、後に東京工業大学の学長となられた加藤六美教授と助手の吉成氏が協力する。

2

谷口吉郎は《第二研究室》のデザイン構想についてこう説明している。

慶應義塾の三田山上には「第四号館」「第五号館」「学生ホール」の校舎が建ち、続いて「第二研究室」が新築された。戦争中、三田はひどい空襲を受けた。その焼け跡に再起を目ざして、乏しい建築資材によってバラックを建て始めた困難な時代から、ようやく鉄筋コンクリートの建物にまで、こぎつけることができた。

私はこの一連の建物に、意匠の一貫性を求めている。それは福沢諭吉によって創建された「演説館」（明治八年、一八七五）にこもる意匠のモラルを各校舎が新しく受けつぐことによって、「福澤精神」のルネッサンスを表現したいと念ずる建築家の構想である^{*1}。

《第二研究室》の機能は文科系3学部36室の研究室から成り、1階南側に談話室（後に「ノグチ・ルーム」となる）、鉄筋コンクリート2階建、延坪317坪（1046 m²）余のものである。

実施設計がほぼ固まった頃、1950年5月2日、アメリカの彫刻家イサム・ノグチが来日する。彼はボーリング財団助成金でヨーロッパ、エジプト、インドを歴訪後の来日であった。イサムの父、詩人野口米次郎は慶應義塾大学文学部教授を40年間務めた方で、イサムはアメリカの夫人の長男として生れ、今度の来日は3度目であり、19年ぶりであった。

来日から4日目、ノグチは父を偲び三田・慶應義塾を訪ねた。この時に谷口をはじめ画家猪熊弦一郎（《学生ホール》の壁画を制作）彫刻家菊池一雄

(《四号館》の前庭に設置されたブロンズ彫刻《青年像》の制作者)、その他新制作派会の方々がお迎えした。慶應側は、野口米次郎の教え子たち、詩人西脇順三郎、守屋謙二両教授が恩師の御子息を懐かしく出迎えた^{★2}。

そして今では有名になったあの言葉「ここは東洋のアクロポリス」とノグチは叫んだのである。谷口はアテネのパルテノン神殿の設計は建築家ノクチノスとカリクラテスと彫刻家フィディアスの共同によって建てられたことに思いを馳せ、「萬來舎」での共同制作を直感的に思いついたのかもしれない。このようなことで、谷口の提案で談話室を「ノグチ・ルーム」とし共同で取組み、ノグチは西側庭園と彫刻の制作に当ることとなった。ノグチはここを父の詩魂に捧げる記念碑として、戦後の青年達の心の傷を癒す隠れ場、思索のトポスとして構想する。

3

ノグチの滞在は大変短く、わずか4ヶ月の期間であった。その間、長谷川三郎と京都旅行。さらに日本美術家連盟からの強い要望で8月18日から30日まで、「イサム・ノグチ作品展」(東京三越百貨店)が開催されることが予定された。この展示の一部に「萬來舎」、ノグチ・ルーム、庭園、彫刻の計画も加わることになり、準備作業期間は5週間と大変短い厳しい作業であったが、全員で準備に取組んだ。

ノグチは津田山にあった工業技術庁・工芸指導所を仮のアトリエにして、田園調布の猪熊弦一郎宅から毎日通った。そこで指導所の剣持勇(日本を代表するインテリア・家具デザイナー)の協力を得て、弟子となった彫刻家広井力と共に彫刻の原型、家具制作に精力的に取組んだ。この間、瀬戸に赴きテラコッタの制作も手掛けた。一方、谷口チームは関龍夫、三枝守正、長塚和郎と私の4人で建築図面、透視図、ノグチ・ルームの詳細図等の展示パネル制作に取組んだ。また模型製作は当時塾生であった植野石膏模型店の植野正春と私の友人橋本嘉夫の2人、計6名が協力した(図2)。

ノグチ・ルームの谷口、ノグチの共同作業は、視覚を通して思考する建築家と体と手を使って思考する彫刻家と、厳しい作業風景であった。その中にまた厚い友情から生れる美しいハーモニーが読み取れた。この風景は東洋と西洋の出会いであったのかもしれない。私たち全員はお二人のイメージを出来る限り理解し、何度も図面や模型を書き起し、つくり変えて最終案まで漕ぎつけた。それは新しいものを創造する喜びの中での苦しみで、最後までこれに耐えた。

会場のレイアウトは谷口が行い、搬入・展示と全員がこれにあたった。展示作業は夜中まで続き、完了した時の安堵感と喜びは今でも心に残っている。その時撮った写真に猪熊弦一郎夫妻、剣持勇、ノグチの義弟野口道夫、長谷川三郎らのお姿がある(図3・4・5)。この全員の姿から、谷口が大変好んだ言葉「一座建立」の精神が流れているのが感じられる。「一座建立」、これは世阿弥の『花伝書』の中の言葉である。

図2 「七人の侍」

(前列左から広井、三枝、由良、植野、後列右から長塚、関) 撮影：橋本

図3 「一座建立」

(準備終了、真夜中の記念写真)

図4 会場準備中のノグチ

図5 谷口吉郎
(イサム・ノグチ展、展示を
無事終えて)

図6 ここで一服
(コンクリート打ち風景、筆
者)

このイサム・ノグチ展は低迷する戦後の美術界、建築界そして社会に大きな反響を呼び、多くの人々に勇気を与えた。展覧会終了後間もなくの9月5日、ノグチは大きな台風が去るように足早に日本を去ってしまった。

その後「萬來舎」の実施設計の作業は続き、翌年、昭和26年(1951)1月15日、工事着工。総工費2400万円。施工——安藤組、電気工事——東光電気、衛生・暖房工事——城口研究所、家具——工芸指導所・三越家具部・高島屋家具部、彫刻——広井力・大井鉄工所・石勝、現場監理——楠元一正・由良滋。

現場監理の経験は私にとって初めてで、色々な出来事があったが、今思

えば楽しい思い出となった。仮枠が立ち上がり、コンクリート打ちが始まる。現場で骨材、セメント、水をミキサー機で練りあげる。その練り具合を抜取り検査する。大変なのは天気によって左右されることだ。小雨の時は骨材に含んだ水の量を調べ、水とセメントの比を割り出す。すべて手作業で簡単な計器を使って行うのである。朝は一番に出勤して行うのが鉄則であった(図6)。今日あらゆるものが自動化、省力化される時代、半世紀前の古い工法は楽しい昔話となってしまった。

4

昭和26年(1951)3月28日、工事進行中に突然ノグチは再度来日する。新しい仕事は東京・竹橋に新築されるリーダーズ・ダイジェスト東京支社ビルの造園とその中に建つ彫刻の仕事である。ダイジェスト・ビルの設計はアメリカの建築家アントニー・レイモンド。彼は1920年(大正9年)、東京帝国ホテル建築のためフランク・ロイド・ライトと共に来日、その後東京で建築事務所を開設して戦前活躍した人で、代表的な作品として《東京女子大学チャペル》等がある。私が学生時代に働いていた建築事務所は戦後、レイモンドを迎える準備事務所も兼ねていた。所長からレイモンドの来日直前、ダイジェスト・ビルの透視図を画くように指示され、一週間、夢中で仕上げ、レイモンドに、お見せした。ノグチがダイジェストの庭を造ることと私の体験が重なり、何か不思議に思えた。

さて、現場での出来事では柱の庇の補修の苦勞話がある。玄関ホール廻り階段とノグチ・ルームの丸柱、角柱は当時まだ一般的に普及されていないコンクリート打ち放し木肌仕上げであった。この施工に当っては谷口、加藤両先生と楠元工務課長の立合いで慎重に行われた。ところがコンクリートが固まった後、仮枠を外してみると、各所にジャンカ(モルタルが脱落し骨材だけが残る豆板状の不良部分)が出来てしまったのである。この詳しい補修方法は、偶然にもレイモンド事務所が戦前からの経験があり、ダイジェストの現場にある事務所に早速出掛けた。

その補修方法の詳しい内容は省略するが、最後の仕上げが面白い。経木(昔、経文を書いたのでいう。杉、桧、などの木材を紙状に削ったもの。包装として使用)を濡らし、モルタルでジャンカの上に塗り込めた上に経木を貼り付け軽くたたき、半乾きの時点でそとと取除くのである。表面に淡く木目が残り完了する次第で、なかなか手の込んだ職人芸の技である。

さて工務課に残されているノグチ・ルームの平面詳細図に、英文で日付と私の名が記されている。これは確認のサインで、日付は6月11日とある。詳細図面が出来上がった時、これを持って北鎌倉のノグチの庵に出掛け、その際に記したものと記憶する。そこは陶芸家北大路魯山人の屋敷内に建つ農家を庵にしたもので、原始的な弥生時代を思わせる建物であった。室内の一方の壁は砂岩が荒々しく全面に露出して、各所に穴が穿かれ、そこに小さな作品が置かれ、片隅には暖炉がつくられていた。床は土間のたた

きで、室内には提灯が置かれている。室内香の匂いが漂って、芸術性の高い不思議な空間であった。何故か私一人で行かされたことが、今でも不可解である。

5

現場でのノグチの制作風景はこのようであった。仕上げ前のコンクリートだけのノグチ・ルーム。その中で彼は簡単な模型を自らつくり、そこに《無》のマケットを置き、室内から外部に向かって、どのような位置にするか前後左右に動かし、片目でマケットを確認していた。

現場にはノグチの訪問客が見学に見えた。その中で思い出す人達は、社中であった写真家三木淳（当時、アメリカの雑誌『ライフ』の表紙に選ばれた）、ニューヨーク在住の画家岡田謙三、東京工業大学建築科の先生方である。また、現場は時々お花見のように賑わった。義弟野口道夫、山口淑子、猪熊弦一郎夫妻たちが折り詰め弁当持参で陣中見舞いにお出でになり、谷口先生を交えて楽しい時間を過ごされた。

これとは対照的な静かな風景もあった。昼の休憩時、職人達が木陰で休んでいる時、その片隅で読書に耽る姿があった。たしか『MODULOR』（黄金尺）、フランス語版（著者はル・コルビジエ、現代建築の巨匠の一人）を読んでもらわれた。本の形が正方形で特殊な表紙であったので、記憶に残っていたのかも知れない。

ノグチ・ルームがほぼ完成間近の、或る朝の出来事である。突然ノグチが語りかけた、「昨晚、夢を見ました、暖炉の周囲に溝を掘ったら良いと。人が腰掛けられると思います。」私は誰にも相談せず即座に「今からはもう無理です」と答えてしまった。今でも呵責の念が残っている。

ノグチと現場での打合せの中で印象に残っている事は、美しいものを認識する際、目と同時に直接手にふれて質感を確かめて知る彫刻家らしい姿である。長谷川三郎と桂離宮を訪ねた時の様子が紹介されている。

戦災をまぬかれ十九年前とあまり変わらない古都に着いた翌朝から、イサムは、長谷川の案内で「日本再発見」を開始する。イサムは愛用のライカを首から下げ、広角レンズと望遠レンズの他に、和紙と筆に墨、硯まで包んだ更紗さらさらの風呂敷をつねに持ち歩いた。最初に向かった桂離宮からはやくも、長谷川によると、〈カメラを持った猟犬〉になった。

靴をぬいで上がった書院から、イサムはあっという間に裸足はだしで庭に飛び下りていた。ものにつかれたようにシャッターを切った。庭を、石組みを、池をとたちまち四本ほどのフィルムを使った*³。

とある。美しいものを体の感触すべてを通して無心で吸収するアーティストの自然の姿であった。

図7 ノグチ・ルーム
中央に据わる暖炉
(撮影：平剛)

ノグチ・ルームの中央に暖炉があって、その真上に不思議な形の銅板製の天蓋（大井製作所）が取付いている（図7）。入口から見て左側の柱は煙突柱である。これを取付ける前に排煙実験を谷口の後輩、石橋直（太平建設工業社長・東京帝国大学工学部建築学科卒）の技術的な指導で行った。煙の逆流、火の形、調節弁の開閉具合、エンジニアらしく計算式までたて、その取り付け位置を決め、谷口先生も安心された。石橋は戦前、谷口設計の《慶應義塾幼稚舎校舎》の現場監理をされ、戦後は工務課のもとで慶應義塾の施設の整備に尽力した、絆の深い一人である。

現場も最終段階に入った。「萬來舎」のシンボルともいえる石彫《無》（広井力、石勝）も西側庭園の中央に据えられ、8月末日竣工した。初めての現場監理の仕事に携り、すばらしい体験であった。その後の私の人生の歩みに多くの啓示を与えてくれた。

6

昭和26年（1951）9月から《第二研究室》（萬來舎）は動き出す。それから間もなくして、私に嬉しい出来事が起こった。父の実兄、叔父成瀬無極がノグチ・ルームの真上の研究室に席を置くことになる。無極の慶應義塾との絆は古く、明治40年（1907）、東京帝国大学・ドイツ文学科を卒業後、慶應義塾予科教授として1年間教え、その後、京都へ移り京都大学を定年退職後、戦後、再び慶應義塾大学の非常勤講師としてドイツ文学を講じた。また、日本ゲーテ協会を設立、自ら会長を務め、事務局を大学に置いた。私は度々研究室を訪ね、二人で三田の山を下って家路についた。母方の祖

父、安生順一も明治26年（1893）、小幡篤次郎塾長の推薦で社中となり、祖母は中津の奥平藩主14代昌服の娘であったので、慶應義塾、福澤諭吉、その絆は古く溯るのである。

《第二研究室》（萬來舎）の完成後、引き続き《第三研究室》（考古学研究室）を谷口の下で担当する。建築のスタイルは《第二研究室》と同じ、鉄筋コンクリート2階建であった。三田山上の谷口の建築はこれで終わり、次に信濃町、慶應病院病棟、医学部校舎の建設に従事する。工務課技師として8年目、慶應義塾理事の大異動があった。これに合せ谷口もすべての設計から退くことになり、門下生一同も各々将来の道を自ら決める転期がきた。私は独立の道を選び、ここでの貴重な体験を身にまとい再出発するのである。

その後、幸運にもオーストラリアでの仕事が連続しており、3度目はメルボルン大学建築学部の招聘講師として3年間滞在する。その間、社中の方と出会い、8年間職員であったことから「メルボルン三田会」に出席する機会が出来た。帰国後は金沢美術工芸大学で教えることになり、故郷に帰省する谷口先生とお会いすることが出来た。3年後、福岡に新設された九州芸術工科大学へ赴任。ここでも慶應義塾との絆は続き、偶然にも晩年の工務課長楠元一正と再会し亡くなるまで、この交りが続いた。

東京を去り、遠隔地に住むようになっても、上京の際は丸の内にあった谷口研究室を訪ね、お忙しい姿を拝見した。時には三田山上にも足をのばし、ノグチ・ルームを覗いて見た。そこは主人のいなくなった茶室のように寂しい、虚ろな空間で、家具も片隅に置かれ、あまり使われていない風

図8 日本建築学会主催
「谷口吉郎展」

景であった。これは一時的な姿であったのかもしれないが、それから私の頭からだんだんとその存在が遠くなってしまった。

7

平成9年(1997)、日本建築学会主催「谷口吉郎展」(図8)が建築会館ホールで開催され、その企画の中に《第二研究室》(萬來舎)の見学会があり、再び脚光を浴びたのである。しかし、それも束の間、突然、衝撃的な記事を建築雑誌の投稿欄で発見する。「谷口吉郎の慶應大「萬來舎」取り壊し計画に待った！」(荻谷洋介さん)^{★4}。

この記事から谷口が戦前、街から明治建築、鹿鳴館が消え、その嘆きを「明治の愛情」と題して新聞に掲載した記事を思い浮べた。

先日、日比谷の近くを通ると、黒門の奥にあった鹿鳴館の姿が消えているのに驚いた。老朽のため不用となったのであろうが、取りこわされたのは惜しい。この洋風建築は明治初期の急進的な外国崇拜を示すものであるので、今日の非常時には国民思想を毒するものと非難されるかもしれない。しかし、過去の歴史的な資料として有意義に活用してほしかった。歴史は曲げたり、抹殺することはできない。むしろ、時の流れを凝視することが大切である。そのために、鹿鳴館の建築を保存し、明治時代に生れた人々が心を合せ、所持品や記録などを持ちよって博物館にしたら、明治を記念する記念館となったろうに。それこそ次の時代における有意義な贈り物となったろうと思うと、惜しい気がしてならない^{★5}。

また谷口が著書『雪あかり日記』の表紙、帯封に残した言葉がある。

建築こそ歴史の花であろう。過去の花、現代の花、色とりどりの中で、いつも私の心をひくものは、その建築の美しさにひそむ清浄な意匠心であった^{★6}。

「萬來舎」の中には、谷口、ノグチの意匠心が深く潜んでいる、悲惨な戦後の中で見事に咲いた花、歴史の花、「福澤精神」を受継いだ花である。谷口の生涯の友、詩人野田宇太郎は谷口の明治村に注いだ情熱の根源についてこう述べている。

これは谷口さんの明治村だって同じじゃないですかね。あの人は学者だから時代がどうしたとかむずかしいことをいうけれども、根本的にはたとえば鹿鳴館が壊されたとか、焼けちまったのを見る、その時のああやう切れないという感じ、これはもう理屈じゃないんで、それを何とか他人にも伝えたいということで始めたのじゃないか、と思うな。

あの人は別に詩人じゃないけど、すくなくともその瞬間には詩人だったわけですよ、彼は。ぼくはそう思うね。^{★7} (傍点筆者)

これは谷口の生涯、助手を務めた大田茂比佐が、明治村通信、野田宇太郎氏追悼号の中で紹介した追悼文の一節である。野田は戦災で森鷗外の邸宅が焼け落ち、その前で心からやり切れなさを味わった。そのことが後年、野田を文学散歩の著作へと駆りたてたのである。

「萬來舎」の解体の報せを知った多くの人々は、野田のいう“やり切れなさ”を深く思い、署名運動、講演会、谷口門下生の保存活動、有職者の嘆願書、イサム・ノグチ財団の現地保存要望書、そして解体工事差し止めの訴訟へと発展したのである。

8

慶應義塾内では慎重を期するためか、公的な検討委員会を発足させた。私も第3回、意見交換会(2002年10月17日)に出席して現地保存の意味を強く説明、要望した。特にコンペティション方式を採用したための弊害について述べた。それは決定案は公的に権威づけられ、後で修正が難しく、間違ったまま建ってしまうことである。その良い例に《シドニーオペラハウス》がある。コンペの結果舞台の広さが不十分なまま工事が終わり、すべて後の祭りとなってしまった。

今回も同様で、具体的な代案が提示されても、決定された後はすべて無視され独走する。萬來舎を取壊した跡地に「シンボル広場」をつくるという魅力に引ずられ、何を失ってしまうかを考えなかった。存在することの大切さを二の次にしてしまった。

戦前、谷口は榎智雄理事から「塾の建築に魂を入れてほしい」といわれ、《幼稚舎校舎》、《日吉大学予科・寄宿舎》の建設に取組み、戦後は三田山上に、演説館の建築的特性——素朴な手法、これを起点として交響曲を夢みて、次々と建築した、第1楽章の《五号館》、第2楽章の《四号館》、第3楽章の《学生ホール》、そして終章が《萬來舎》と展開する。それは彫刻、絵画、造園、建築と「総合芸術」とした見事な作品群であった。

谷口はこの構想についてこう述べる。

私は、三田山上に設計する諸作は「能舞台の背景」のようなスタイルの沈黙を守りたいと考えている。それに対して、彫刻や絵画は能舞台の衣裳や小道具のごとく、表情に富むものをも配合したいと考えている。そんな建築を背景とし、そんな彫刻や絵画の粧いによって、福澤イズムの新しいルネッサンスが三田の学究の徒によって力強く演ぜられるのを、私は建築家として心から祈っている^{★8}。

ノグチもノグチ・ルームに取組む際にこの様な思いを残している。「英雄

を讃える記念碑ではないし、誰かを追想するためのものでもない」それは学生たちが息抜きに来て、詩をよみ、思索と反省によって満ち足りた気分になるための場所となるはずであった。

私はそこを、京都の詩仙堂や中国やその他の地域にある、魂を奮いたたせ喜びをもたらすような素晴らしい模範的な場所と似通ったものにしたかった^{★9}。

また、他にも

父の精神を最もよくいつまでも伝え得る場所として、一つの室と庭とが、私の提供出来る最良の表現であろうと思われました、それは、父の詩によって表現された美の理想に基いた、くつろぎと冥想との場所であるべきでした、この仕事を私がやるのは、私が単に父の息子であるからと言うだけでなく、彼の詩の中に体现された東洋と西洋との両観点の結合と言う事に、丁度背景の点でも、またそのように生れて居る点でも、適当して居るからだと考えたかったのです。

芸術と言う共通の言語であるあの橋を継続する事が私にやれたとすれば、私は、いつかすべての人々と結び合せねばならぬ人間的な前途の望に私としての寄与をした事になるのだと感じました、終戦は、青年達に、未だ生れない未来をのこしました、そして、彼等が受けた傷手のつぐないに、日本の青年諸君にこんなふうには話しかけ得ると言うのは私に許された特権です。実際慶應義塾の学生諸君だけでなく、日本のすべての学生諸君がそこに来てかくれ家を見出して呉れるようにと望んで、私は、これをのこすのです^{★10}。

この、お二人の言葉の中に暖かいヒューマンな深い思いが感じとれる。

9

谷口のコンセプト、「演説館」の素朴な建築意匠を受け継ぎ、三田山上に第1楽章から終章の「萬來舎」までの建築意匠の累積的展開は、イタリア現代建築の巨匠、カルロ・スカルパの「レスタウロ (restauro)」のコンセプトと共通したものを思わせる。

それはわれわれが、現在、未来にわたって生きるために、生まれ変わらせることで、そして、建築において、既存の建物が材料の一部になることだ^{★11}。

谷口吉郎と野田宇太郎、二人の生涯の恩師、木下杢太郎（太田正雄）の残した言葉「過去とは背に廻った未来である。」、この言葉を継いで「明治村」、

図9 悲惨な風景

(ノグチ・ルーム南壁の
テラコッタ・タイルを剥
し、無雑作に置き並べて
ある)

の創設、「文学散歩」の著作に情熱を注ぐのである。私は「萬來舎」の現地保存に向けて叫んだ、“Protecting the Past for Future”と。しかし、社会が強く要望した現地保存は全く無視され、「萬來舎」はついに解体されてしまった。

ここに一枚の取こわされたノグチ・ルームの現状写真(図9)がある。これらは南壁に張られた素焼の陶板でノグチが表面を竹掃木の先で荒らした美しい質感のものである。無雑作に床に並べ置かれた、その姿はまるで敗者のように思えた。“ああやり切れない”と絶句した。「詩は煙のように消え失せ、花が散ってゆくように、もう元の美しい姿はもどって来ない」と、私は寂しくつぶやいた。

ノグチ・ルームは予定通り移築され、そのレプリカはやがて出来るだろう。しかし原型の持つ歴史の証言としての谷口、ノグチの詩魂は永遠に消え去ってしまったのだ。

註

☆1——谷口吉郎「慶應義塾大学第二研究室(万來舎)」、『谷口吉郎著作集』第四巻(作品篇1)、淡交社、1981年、204頁。(初出は、『新建築』1952年2月号)

☆2——谷口吉郎「美術の新しい開拓者」、『世界美術全集月報』第1号、平凡社。

☆3——ドウス昌代『イサム・ノグチ：宿命の越境者』下巻、講談社、2000年、22-23頁。

☆4——荻谷洋介「谷口吉郎の慶應大『萬來舎』取り壊し計画に待った！」(短信往来)、『建築ジャーナル』2002年8月号(No.1024)、54頁。

☆5——谷口吉郎「博物館明治村、歴史の証言者、発心」、『谷口吉郎作品集』、淡交社、1981年、261頁。

☆6——谷口吉郎「あとがき(Ⅲ)」、『雪あかり日記』、中央公論美術出版、1974年、234頁。

☆7——『明治村通信』170号(桐後亭、野田宇太郎氏追悼号)、昭和59年8月。

☆8——前掲☆1「慶應義塾大学第二研究室(万來舎)」、205頁。

☆9——ドーレ・アシュトン『評伝イサム・ノグチ』、笹谷純雄訳、白水社、1997年、158頁。

☆10——イサム・ノグチ「仕事について」、長谷川三郎訳、『新建築』1952年2月号、

9-59頁。

☆11——豊田博之「ヴェネツィアで出会った師=カルロ・スカルパ」、『カルロ・スカルパ』（《現代の建築家》シリーズ）、鹿島出版会、1978年、154頁。

（ゆら しげる・九州芸術工科大学名誉教授／建築意匠）